研究 No.9707

中世末の畿内における寺内町の成立と変遷に関する研究

主査　日向　進
委員　河邊　聡　　池田　俊彦
　　矢ヶ崎善太郎　　松田　剛佐
　　岩波　由佳

［研究論文要旨］

本稿では，従来対象とされなかった原初的寺内町の特質を明らかにすることを目的とする。『天文日記』から石山本願寺を中心とするネットワークを形成していた有力寺院・門徒の地域を抽出し，現地調査を行い収集した基礎史料に基づいて，それぞれの地域の中世末から近世にかけての成立と変遷の過程と町割形態に関する考察を行った。本願寺の支配体制のもとで個々に発展した地域を広く全体的に対象とすることで，相互の比較，都市的「寺内町」との比較を通して集落・都市としての発展段階の位置づけを行った。いずれの地域も本願寺の「頭」役を務めるなど経済的に本願寺を支え，経済基盤が確立しており，中世末には近世的な町場に先行するなんらかの集落が形成されていたと見られる。しかし，その後の展開においては，必ずしもすべての集落が代表的寺内町に見られるような整形の町割で背割りの街区を形成する計画性に結びつくわけではない。近年の寺内町研究では整形街区を形成する町形態は中世寺内町ではなく，むしろ近世に確立されたという見方が提唱されており，本稿においても同様に考えられる。計画性の差異が生じる理由のひとつとしては更地から開発された寺内町ではなく，先行する既存の集落・寺地が存在しているため制約があることが考えられる。また，近世期に寺基が移転してきた地域（大井・光蓮寺）に「寺内」としての計画性がうかがえることも近世的都市計画手法の存在を示唆している。天文期の有力門徒地域と近世的発展をした寺内町は必ずしも合致せず，中世末の段階から近世に確立された計画性のある都市へと移行する段階で，町形成に対しなんらかの都市化の意図が働くことが想定され，地域の差異が発生するのではないかと思われる。都市化の意図が働かなかった地域は，中世の基盤をもとに近世においてそれぞれの地域の特質－地形・舟運・街道など－に影響されながら展開するといえよう。

Study No.9707

A STUDY ON THE FORMATION AND THE TRANSITION OF JINAIMACHI IN THE KINKI DISTRICTS AT THE END OF THE MEDIEVAL PERIOD

Ch.　Susumu Hyuga
mem.　Satoshi Kawabe　　Toshihiko Ikeda
　　Zentaro Yagasaki　　Kosuke Matsuda
　　Yuka Iwanami

[SYNOPSIS]

Jinaimachi was a self-governing city planned intentionally as the center part around the Shinshu temple. It formed at the end of the medieval period in Japan. Jinaimachi had many variations in it's development, and now, new ideas to understand Jinaimachi are needed. In this study, based on "the Tenbun-nikki", the diary of Shonyo, extracts the areas which related to the Honganji in the medieval period, explain the organization and the transition of those areas as well as the restoration to its original form.

Every area was an important part of the Honganji and helped the town of Honganji develop economically. But after medieval period, there were differences between the development of the city among the areas. Comparing the areas developed in medieval period and formed the cities, Jinaimachi, a difference is seen in the scheme of city planning. The city planned square was built in the Edo period. Medieval cities did not always develop directly into the modern style. The square shaped planning appeared in Jinaimachi in the Edo period. That suggests some intention acted to the formation of the city. The intention made the difference in the shape of the town. Jinaimachi, which developed into the urban community, formed the square sections of the town. And othe areas without changed into a modern villages judging from the geographical features, the transportation by the roads and the sea. They used various methods to change the form of the cities as seen in the complex cities Jinaimachi, road based cities and post towns.

研究 No. 9707

住宅総合研究財団
研究 年報No. 25 1998

中世末の畿内における寺内町の成立と変遷に関する研究

主査　日向　進*1
委員　河邊　聡*2　池田　俊彦*3
矢ケ崎善太郎*4　松田　剛佐*5
岩波　由佳*6

キーワード：1）寺内町，2）中世都市，3）近世町割，4）在郷町，
5）街道，6）都市史，7）市街地形成，8）まちづくり

1. 研究の目的

寺内町は，中世末・戦国期を通して真宗寺院を中心に宗教的連帯に基づいて形成された自治都市として捉えられている。本願寺8世蓮如の精力的布教による真宗勢力の拡大を契機として，畿内－特に摂津・河内・和泉－の各地に寺院・道場が数多く創建され，門徒の集住する地域が形成された。永禄以降からは本願寺の支配体制が整い，大坂石山本願寺を中心として「大坂並」[文1)]と呼ばれる都市特権（守護不入・地子免許・諸役免許）が各地域に広がり，寺院・道場を中心に門徒が集住して集落が形成され，商業活動の活発化とともに都市化した場＝寺内町が発展した。発展の背景には本願寺による都市特権の獲得・保証の他，畿内の経済活動の先進性，陸・河川交通路の充実，入り組んだ守護大名支配などがあげられる。また，寺内町間では石山本願寺を頂点として，経済的・宗教的に互いに結びつくネットワークが形成された。寺内町は経済的に繁栄し，富と技術の蓄積によって戦国大名に比肩する本願寺教団を支えた。文献史学－特に社会史，経済史－の視点においては，寺内町は中世都市の最も高レベルな達成形態のひとつであるとされ，宗教・経済・政治の統合による「進んだ」都市であると捉えられている[文2)]。一方，都市としての物理的形態の分析については，80年代から建築史・都市史の分野において研究が進み，中世から近世に移行する際の都市空間構造が論じられてきた[文3)]。しかし，史料の制約等の理由から研究対象は大坂石山本願寺が中心であり，他の地域では代表的な寺内町－大和今井・河内富田林・久宝寺・和泉貝塚など－が個別事例研究[文4)]として取り上げられているのみである。これらは，近世在郷町として発展し，遺構・町並・史料ともによく残る地域であるが，現存する絵図類は江戸期を遡るものはなく，現在見られる遺構・町並は近世に確立された可能性が高い[注1)][文5)]ことから近世期の「寺内町」と草創期の「寺内」状況には，ずれがあると思われる。「寺内町」という学術用語を規定するうえで，一定の集落を「寺内町」として捉える条件として，
1．形態（周囲を堀で囲まれ整形の町割をもつ）の特質，
2．禁制など都市特権の有無，があげられてきた。しかし戦国期において，必ずしも都市化を指向しない「農村内の諸役免除を希求した農村集落型寺内」の存在[文6)]，
1．2．どちらにも当てはまらないが「寺内」という語句が用いられる場合，計画性はないが明らかに「寺内」としての意図が窺える場合などいろいろな事例[注2)]が見られる。近世の都市化する一元的な発展形態をもってのみ寺内町を規定するのでなく，確立された都市形態を有さない「寺内」の存在も広義の「寺内町」として，都市発展の段階のひとつに含めて考える必要がある。今回着目したのは中世末『天文日記』[文7)]に見える本願寺と密接にかかわり，有力門徒衆の在所であった地域の発展過程と集落としての形態である。石山本願寺を中心とした都市間ネットワークとして寺内町を捉えた場合にも，従来は寺内町として扱われなかった集落も研究対象となると思われる。本稿では『天文日記』から石山本願寺を中心とするネットワークを形成していた有力寺院・門徒の地域を抽出し（**図1－1**），（**表1－1**），現地調査を行い収集した基礎史料に基づいて，中世末から近世にかけての成立と変遷の過程と町割形態に関する考察を行った。本願寺の支配体制のもとでの個々に発展した地域を広く全体的に対象とすることで，相互の比較，都市的「寺内町」との比較を通して集落・都市としての発展段階の位置づけを行い，特質を明らかにするのが目的である。

*1 京都工芸繊維大学　教授
*2 京都工芸繊維大学　教授
*3 福井工業大学　講師
*4 京都国際建築技術専門学校　教授
*5 京都工芸繊維大学　助手
*6 京都工芸繊維大学　研究生

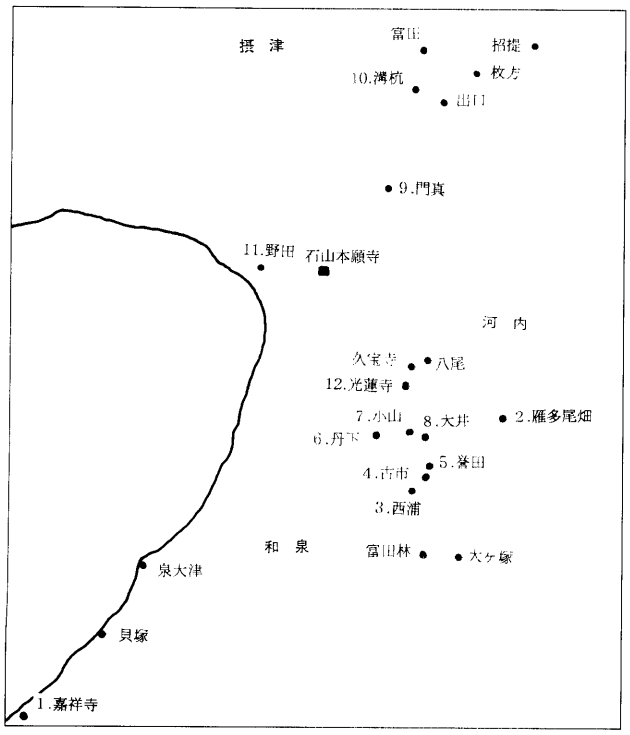

図1—1　摂津・河内・和泉の有力門徒地域および寺内町の分布図

表1—1　有力門徒地域の『天文日記』登場回数

天文（年）	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
嘉祥寺	1							1	1		3	1		1		1	1		
雁多尾畑	2	6	3	5	2		7	2	4		5	3					5	4	2
西浦	1	1	1	1	1							1		1			1	1	
古市	1		1	1	1							1							
誉田	1		1									1							
丹下	1		1		2	2										1		1	
小山	1	3		1		1										2		2	1
願寺（貴浦）	2	2	2	1	1	1	2	2	1			2		1		1	2	1	
溝杭				1	2		1		3			4	1	1		5	2	2	3
野田	6	1		1	1	1			1		1								
光蓮寺（若江）	1	1	2	2	1	2	1		1			3	2	1		1	2	1	2

2.『天文日記』に頻出する集落の成立過程と形態

2.1　嘉祥寺　真光寺　泉南郡田尻町嘉祥寺

前身は真言宗であったが覚如が紀州行の折に嘉祥寺に滞在，真宗に改宗したとされる。文明18年（1486）蓮如が紀州に赴く際，嘉祥寺で1泊したことが『御文』[文8]文明18年3月14日条に見られる。『天文日記』において「嘉祥寺」「真光寺」は当番として金品を持参したり，斎の相伴に呼ばれるなど有力坊主衆の位置にあった。天文11年（1542）真光寺は9代誓賢により紀伊雑賀の宇須に寺を移し，寛永2年（1625）和歌山新町通に再び移転，嘉祥寺と宇須の両寺を支坊とする（寺伝）とされるが，天文11年以降も「イヅミ真光寺」と記されていることから，和歌山に移転したにせよ，泉州の真光寺も従前の地位にあったと思われる。天正6年（1578）9月26日本願寺顕如の「紀州湊等諸浦門徒宛文案[文9]」に信長の天王寺着陣に対する戦闘準備を呼びかける書状に「湊　雑賀　岡　松江　嘉祥寺　吹井　加太　其外諸浦警固衆中」と紀州・泉州の重要な戦闘拠点の浦地のひとつであった。嘉祥寺は「蓮如上人筆六字名号」「蓮如上人筆御文章」を所持し由緒の古さとともに戦国期を通して本願寺の有力な坊主衆として，本願寺戦力の門徒地域としての位置にあった。嘉祥寺真光寺は慶安3年（1650）良如より木仏本尊を授与されている。近世に入っては一般村落として封建体制下におかれ，浦役銀が佐野村に次ぐ額であったことからも漁村として発展したことがうかがえる。

集落形態

集落の北西は大阪湾に臨み，海岸沿いを旧浜街道（紀州街道）が通る。蓮如の紀州行の途次でもあった嘉祥寺は，中世海上交通路の拠点のひとつであったと思われる。また，陸路として浜街道は，中世海岸部に発達しだした湊・町場をつくり，後の紀州街道へと発展する[文10]。嘉祥寺においても中世後期には海岸部の町場として集落が形成されていたと思われる。現在の形態から考察すると，海岸線沿いに通る浜街道に沿って南は田尻川に区切られ，北は大規模開発がされているため不明部分が多いが清水川まで，全体としては真光寺を中心として平行に集落が形成されている。ただし，真光寺の全面道路は軸線が斜めにずれ，交差する通りが食い違いになる。このような特徴は，街道から海側は近世期の漁村としての発展による開発で小規模な町割となり，寺院を中心とする山側は戦国期特有の複雑な防御的形態を残しており，同様に海沿いに発展した貝塚，泉大津[文11]にも共通する点が見られる（**図2—1**）。

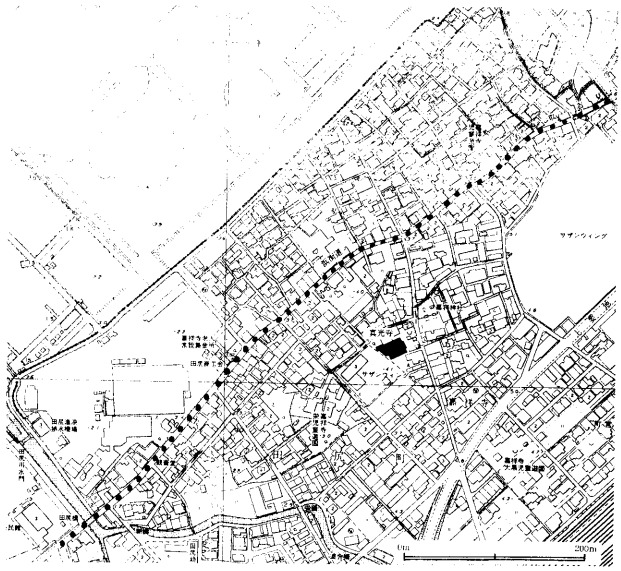

図2—1　嘉祥寺集落図

2.2　雁多尾畑　光徳寺　柏原市雁多尾畑

開基は永延2年（988）真言宗。天永4年（1113）興福寺による焼打ち後，園城寺の僧俊円が寺を再興，光徳寺とする。安貞2年（1228）後堀河天皇宣旨をもって光

徳寺境内三百町を寄付された[文12]。後俊円は親鸞に帰依，信乗と改め八尾慈願寺とともに河内における真宗弘通の第一歩となる。3代乗栄は覚如と交流し，活発に布教を行った。8代乗順は本願寺と密接に関係し，実如より永正12年（1515）11月3日の奥書のある「御俗姓御文」，大永2年（1522）「親鸞絵像」を下付されている[文13]『天文日記』において「光徳寺」は数多く登場する。内容は年忌の志や品を届け，点心や酒を振る舞ったり，当番として品物を持参している。本願寺側の扱いも正月の佳礼の対面や報恩講の斎には三番定専坊等の有力門徒と同等に参席を許している。また，奏者を通じてアドバイスを行い，使者として対外交渉に当たり，正月の歌初めに参加し，葬礼の中陰者として読経をするなど，乗順，子乗賢は証如に近侍し本願寺内で重要な立場にあった。天文6年の段階で「大坂光徳寺」の記載が見られ，この頃すでに大坂に駐在していたことがうかがえる。特に，天文11年3月10日条では「光徳寺宿所へ飯ニ行候」とあり，証如を招き酒や飯で接待しており，大坂寺内に「宿所」と呼ばれる寺坊を構えていたと思われる。乗賢も同様に石山戦争時に活躍し，その功により御坊同格の扱いを受けるようになる。天正3年（1575）顕如より下付された「本願寺代々次第」裏書には「摂州東成郡生玉庄大坂，願主釈乗賢」とあり[文13]，大坂本願寺寺内に光徳寺支坊をもち常住していたことがうかがえる。近世を通して大坂光徳寺は本願寺末の有力寺院であり，寛文13年（1672）雁多尾畑村の門徒らは以後大坂光徳寺寺法を守ることを誓約する一札[文14]を入れている。

集落形態

集落は大和川の亀瀬峡谷から山を登り，信貴山南斜面の標高200～250mほどの丘陵に位置する。大和と奈良の往還のひとつである古代大津道は，柏原市安堂で東高野街道と交差したあと龍田道につながり，青谷を経由し雁多尾畑から龍田大社（奈良県生駒郡三郷町立野）へまっすぐ下るルートであった[文15]とされ，雁多尾畑集落の北方に龍田大社への道標が残る。安貞の宣旨からも集落としての歴史はかなり遡ると思われる。現在，集落は光徳寺を中心に山間の高原状の土地に広がり，高低差が大きい。集落西側が上町，光徳寺を中心とした東側が下町となる。下町の集落の主要道路沿いは町場化しているが，特に計画性は認められない。元禄11年（1698）村勢[文14]から見ると村高670石2斗5升，家数115軒と周辺農村の中では大規模である。また，先述の一札に「寺地者従往古諸役御免許無年貢之屋敷にて」とあり，村落内での特権を有していた。由緒の古さや中世末の本願寺での活躍にもかかわらず近世一般農村としての展開にとどまったのは，地理的に大坂から離れていたこと，中世末，近世を通して本願寺においての主な仕事は大坂の支坊で行われていたこと，近世期主要街道から遠く商業的に展開しなかったことが理由であろう。

2.3　西浦　覚永寺　羽曳野市西浦

覚永寺はもと天台宗であったが親鸞に帰依，真宗に改宗したとされる。覚永寺の門徒は西浦衆と呼ばれ河内門徒の代表のひとつであった。『天文日記』には西浦・古市・誉田・大井がともに頭人として頭料をほぼ毎年本願寺に志納し，斎を相伴するなど重要な位置を占めていたことが記されている。

集落形態

羽曳野丘陵と高屋丘陵に挟まれた低地に位置し，古くは浦江であったともいわれる。天保14年（1843）「河州古市郡西浦村領内絵図」[文16]によると西浦の集落は羽曳野丘陵の東麓に展開し周囲は水田が広がる。南方に「枝新町」を出し，西方に日吉神社を配する。西浦の小字名[文16]に「堂」「中」「北」「北ノ出口」があり，「堂」の覚永寺を中心とした町の展開がうかがえる。現在の集落は白髪古墳南方に覚永寺を中心に約500m×250mの整形に展開し，集落内の道路は食い違いとなる。

2.4　古市　真蓮寺　羽曳野市古市

古市は東高野街道と竹内街道の交差点近くに開けた市町で，古代から集落形成が進んだ。中世は古市庄。応仁の頃，古市の南方に畠山氏の居城として高屋城が築かれた。この頃から戦国期を通して高屋城は河内の政治の中心として多くの合戦が繰り返されたが天正3年（1575）落城，破却された。東高野街道と竹内街道の交差する北東部に位置する西琳寺は古代寺院の法灯を継ぎ，古い由緒をもつ。鎌倉時代に中興され，以来天正年間の焼失まで各史料に寺名が見られる。古市は天文頃には石山本願寺の拠点のひとつとなり西浦・誉田とともに『天文日記』に存在が記される。天正8年（1580）古市は戦火で灰燼に帰したが，森田家を中心に町が復興される。森田家は中世末に遡り古市に居住し，庄屋も務め，近世には豪商となる古市の中心的存在である。文禄3年（1593）「古市村検地帳」では百姓488人とかなりの規模の集落で商人や職人も多かったことがうかがえる[文17]。

集落形態

延宝5年（1677）「古市の旧村絵図」[文16]によると，集落の東側を石川が北流し，西側には西川（大乗川）が流れる。南方段丘には高屋城跡が掘割を残す。絵図北端に西琳寺境内が描かれ東高野街道と竹内街道が交差する。各街道は集落入り口辺りで直角に曲がる。西川近くの白鳥神社まで街道交差点を中心に集落が形成されている。絵図上では家屋は描かれず，丸で囲み「町ノ長，南北弐百拾間，同，東西弐百五拾弐間」と記されている。天保9年（1838）「村差出帳」には中・北・東・西・南・堂の内の六町と古屋敷・水守・竜王寺の出郷三ヶ所が記さ

れる[文17]。現在も西琳寺の南・西方は古い町並を残し大規模な町家も多い。集落内道路は食い違いになるところが多く，防御的形態をとる。古市は古代からの交通の要衝という立地により，西琳寺門前，高屋城周辺，本願寺門徒団拠点と各時代で町場化する要因をもち続けてきた特徴がうかがえる。戦国期動乱の河内の中心であったため防御的形態をとっていたと思われ，江戸に入っても踏襲されている。また，集落内を六町に分けるのは寺内町の特徴であるとされ，招提[文18]や富田[文19]に見られるが古市においても残されている（**図2—2**）。

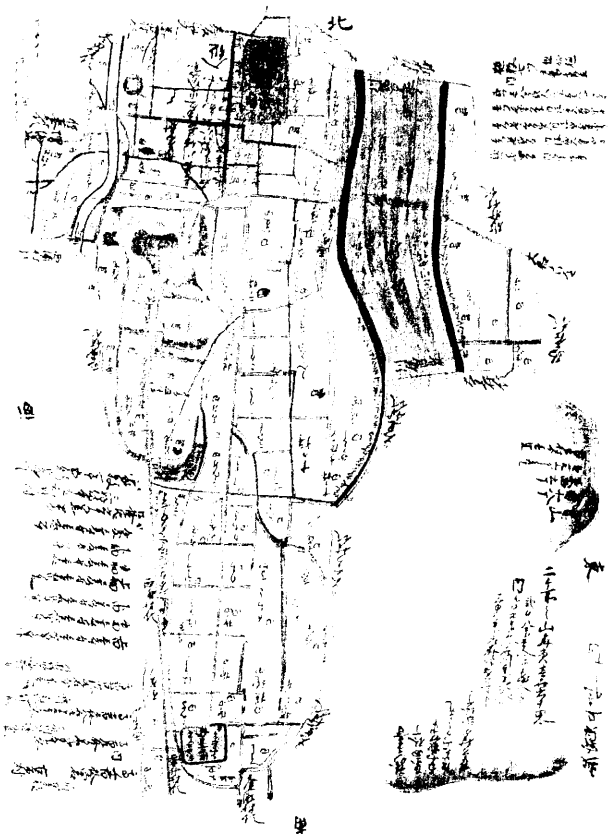

図2—2　延宝５年（1677）古市の旧村絵図

2.5　誉田　勝光寺　羽曳野市誉田

勝光寺は真言宗から真宗に転じ，３代正光は蓮如の弟子と伝える。室町時代とされる本尊の墨書名は「河内国誉田西落惣道場」とあり，寺号は有していない[文20]。『天文日記』天文５年４月22日・25日・26日条では遊佐・木沢両守護代から本願寺へ制札２枚が届き，証如は誉田に掲示するよう申しつけている。高札の内容は「河内国以無事筋目，門徒衆不可有別儀之由」と門徒の安全と保証を約したものであった。『天文日記』には西浦・古市・誉田・大井がともに頭人として，頭料をほぼ毎年本願寺に志納し，斎を相伴するなど重要な位置を占めていたことが記されている。

集落形態

誉田は羽曳野市の北東端，古市の北に位置する。天保８年（1837）「河内国古市郡誉田村画図」[文16]は元禄５年～享保15年（1692～1730）の古絵図を写したものであるが，家並などは天保期の状態と思われる。応神天皇陵南麓に位置し集落東側を南北に東高野街道が通る。集落西側は「大瀬川（大乗川）」が南から北へ流れ，集落の北で垂直に曲がり東へ流れ去る。東高野街道沿いは町家が建ち並ぶ街路的形態で，南寄りに「御公札」がある。八幡宮の南側に広がる部分は長方形の整形街区をとる。集落内の家々は写実的に表現されており，おおむね平屋であるが２階建てのものも見られ，屋根も茅葺が多いが瓦葺もある。寺院はどれも街道沿いに位置する。誉田は街道沿いの街路集落と誉田八幡宮の門前町が複合して形成されている。寛政11年（1799）文書[文21]によると村内には馬場町・鍛冶町・西之口・王水の４町があった。弘化２年（1845）職業調査[文21]では鍛冶町には鍛冶職が集まり，大工・宿屋なども多く近世期には街道筋の町場として繁栄したことがうかがえる（**図2—3**）。

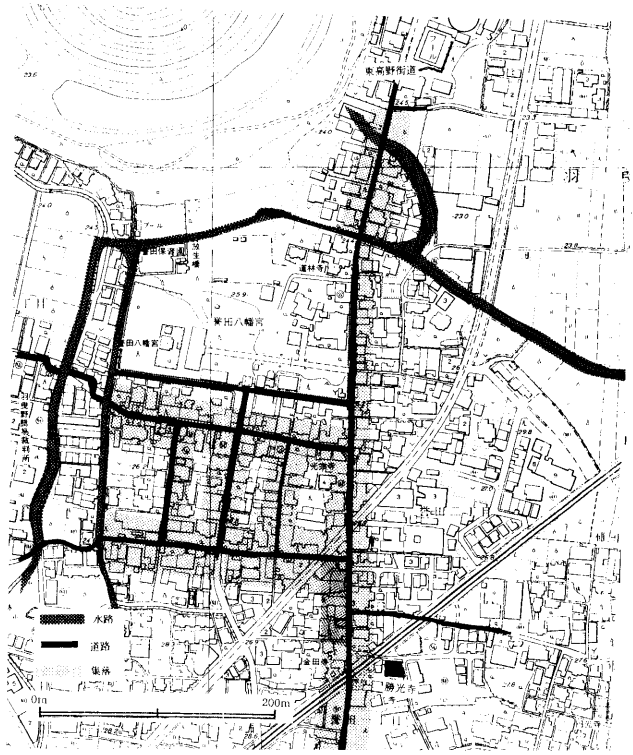

図2—3　誉田復原図　天保８年（1830）「河内国誉田村画図」をもとに

2.6　丹下　長蓮寺　羽曳野市恵我之荘

『天文日記』によると丹下も頭料を納め，丹下衆が斎を相伴するなど本願寺の有力門徒であった。藤井寺周辺ではこれらの地域が門徒集団として発展していたことがうかがえる。

集落形態

丹下は羽曳野市北西端に位置し，北は長尾街道に限ら

れ南へ広がる。「丹下の旧村絵図」（無年紀）[文16] では集落は村域の東寄りにあり，東端に「長蓮寺」，西端に神社を配す。集落内に11棟の屋根のみが描かれた建物は集落を示しているものと思われる。長蓮寺を中心としたほぼ方形の集落で周囲に水路が巡らされているが，集落内の宅地割は不明である。集落内には字北浦，字辻内の地名が見られる（**図2—4**）。

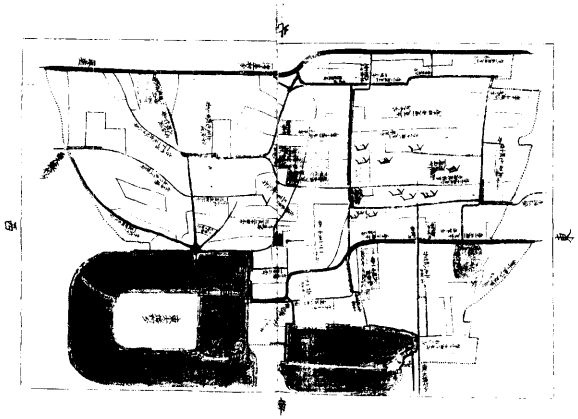

図2—4　丹下の旧村絵図（無年紀）

2.7　小山　妙楽寺　藤井寺市小山

妙楽寺はもと天台宗で永和２年（1376）倬如に帰依，真宗に転じた。寺蔵の「親鸞聖人御影」裏書には文明15年（1483）７月25日「丹北小山」宛とされる。『天文日記』によると「河内小山」はほぼ毎年本願寺の頭料を負担し，「小山衆」数人が斎の相伴に招かれている。頭料は「小山了賢」が代表して持参し，天文20年頃以降は子の了意が代わって現れており，天文期を通して有力門徒集団を形成していたと思われる。また慶長10年（1605）「妙楽寺門徒河内国古市郡西口村従惣道場」に木仏が下付されている[文22] ことから，近世初期には末寺をもち寺号を称していた。『慶長日記』[文23] では慶長16年（1611）棹如忌日に「河内小山ノ妙楽寺」が頭人を務めており，中・近世を通じて本願寺の有力な門徒地域であったことがうかがえる。

集落形態

小山は南北に通る和州街道によって，西東に丹北小山と志紀小山に分かれ，近世の所領関係も別となる。丹北小山の地は約50m四方で碁盤の目状に区画された集落で，妙楽寺は１ブロックの約半分近い435坪を占める。宝永２年（1705）「河州丹北郡小山村領内碁盤絵図」[文24] によると妙楽寺を中心に３ブロック×３ブロックの整形の地割がなされ，「屋鋪」として色分けされている。妙楽寺向かいには長因寺，裏には称念寺と寺院はかためて配され集落の中心となる。各ブロックは東西通りを中心に背割に区画され短冊形の地割となる。妙楽寺は「四畝御除地」とされ鳥居と本堂が簡略に描かれる。集落内および周辺の一部には水路が巡り独立した計画性がうかがえる。「河内国丹北志紀郡小山村屋敷絵図」[文25] は文政元年～天保14年（1818～1843）頃と推定され，和州街道を挟んで多少の入り組みはあるが，ほぼ西側が丹北小山，東側が志紀小山に分けられている。町割はどちらも同様に整形街区をとり，東西通りを中心とした短冊型地割である。志紀小山は明願寺を中心とし，元禄５年（1692）「寺社数改帳」[文25] によると，梁行３間桁行間の藁葺の道場の形態であった。街道沿いは南北軸を中心とした地割となり，街道沿いに町家が並ぶ形態をとっていたと思われる。浄土宗善光寺があり寺社数改帳から戦国末の開基かと思われる。

小字名[文24] では津堂山古墳南側に約200m×150mほどの宅地が広がり，西側が妙楽寺を中心とした「里中」，東側が「施基」，宅地の西方が「西口」とされる。小山の地は中世・近世を通して，本願寺においての有力寺院であったことから，中世期形成された門徒集団を基盤に，そのまま近世の在郷的な発展へとつながったと思われる（**図2—5**）。

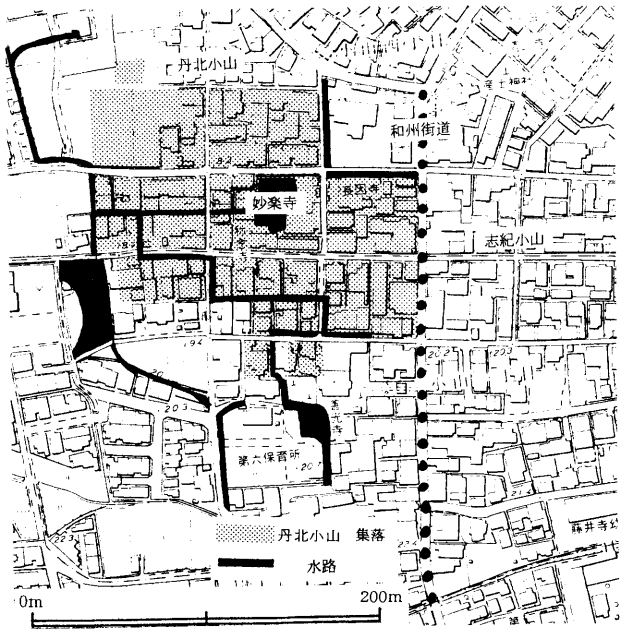

図2—5　小山復原図　宝永２年（1705）「河州丹北郡小山村領内碁盤絵図」をもとに

2.8　大井　誓願寺　藤井寺市大井

応永３年（1396）大井庄として教興寺に安堵されている。寺伝では誓願寺はもと江州箕浦にあり，蓮如と関連が深く，湖北十ヶ寺のひとつとして有力であった。大井は『天文日記』において，前出の西浦・古市・誉田とともに頭料を納めており，中世末の段階ですでに門徒団が形成されていた。箕浦誓願寺は大坂夏の陣の際，敵をかくまったことが慶安２年（1694）露見したため破却され，

一旦本願寺預かりとなり，元禄３年（1690）河内国大井に寺基を移した[文26]。近江から河内へ移転の際の大井の選定理由はわからない。文禄３年（1594）「河内国志紀郡大井村検地帳」[文27]によると，「道徳」屋敷箇所の付箋に「右道徳と御座候ハ当時誓願寺」とあり，貼付された時期は不明であるが「道徳」が誓願寺の前身であったこと，また村内５番目の高持であったことがうかがえる。

一方元禄５年（1692）「河州志紀郡大井村寺社御改帳」[文27]には「盛光寺」とあり，以降誓願寺とする旨が記されている。誓願寺としての開基は建長頃の石川郡山田村道場に始まり，志岐郡西老原に盛光寺建立を経て寛永６年（1629）現在地に移ったと伝える。その頃現在地には妙徳寺と称する寺があり，草創については不祥であるが文禄検地帳には道場とある。いずれにせよ大井に誓願寺が確立されたのは近世期であり，文禄の段階では村の惣道場規模であったと思われる。

集落形態

大井の地は新大和川沿いに位置し，東西約500m南北約250mの集落である。安政３年（1856）「河内国志紀郡大井村領分絵図」[文24]は新大和川両岸の大井村領内の道・川・屋敷が描かれる。屋敷・田の各地筆の形状は書かれていないが，小字名・面積・石盛・所有者名が記入されている。天保14年（1843）「河内国志紀郡大井村明細帳」[文27]が絵図の時期に近く，あわせて当時の状況がうかがえる。大井の集落として東西約400m，南北約200mの水路で囲まれた屋鋪地が描かれている。明細帳によると家数170軒，人数716人である。集落の中心に北から誓願寺，氏神牛頭天王社と常楽寺，水路で囲まれた弁財天社を配す。絵図で見るかぎり，四周を水路で囲まれた明らかに環濠化された集落であるが，内部の町割は不整形である。集落内のほとんどの道路は雁行する。所有者名の配置から見ると敷地の形状はおおむね東西軸に沿って短冊形の地割となり，背割りにはならない。また，同一の者が複数ヶ所，所有している傾向が見られる。文禄３年（1594）検地帳では，「屋敷地」が92筆，うち「空き屋敷」46筆と空き家が目立ち，同一人が複数の屋敷を所有していることが多い。

明治の地籍図および小字名[文24]によると大井の集落は周辺に水路が巡らされ，内部は「町」と呼ばれており，ところどころに「垣外」の飛び地が点在する。集落の北側西に「北口」，東に「堂ノ後」「辻堂」，南側西に「南口」，東に「的場」，集落内の東北端に「東口」という地名が残る。集落の東には「瀬ヶ井垣外」が接する。大井は中世末本願寺有力門徒の地域として集落が発展したが，近世一般農村となって文禄検地頃には集落は空き屋敷が増え衰退したと思われる。その後誓願寺が誘致され，村は誓願寺を中心に復興したと考えられ，集落の基本的形態は中世末期の防御的形態を踏襲しながら近世村落として展開した。周囲を水路で囲むという形態は「寺内」としての意図を表しているとも考えられ，大井の特徴である（**図2―6**）。

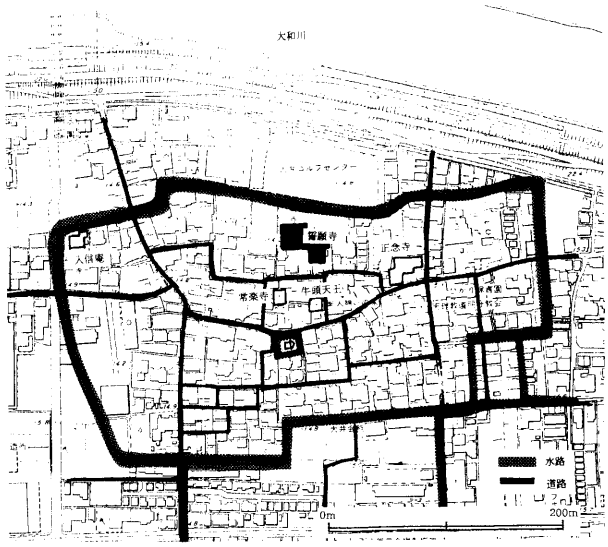

図2―6　大井復原図　安政３年（1856）「河内国志紀郡大井村領分絵図」をもとに

2.9　門真　願得寺　門真市御堂町

蓮如の第23子実悟の草創。実悟はもともと加賀に住していたが，享禄の錯乱により本願寺から勘気を被り諸国を放浪し，天文19年（1550）赦免され吉野本善寺に寄寓したのち，石山本願寺に出入りして門真にも布教した。門真庄には永禄10年（1567）以前よりいたと『実悟記』[文28]に記すが，先に蓮如による布教と古橋坊の建立があったともされる。阿弥陀如来絵像の裏書に「大谷本願寺釈実如（花押）永正六年（1509）己巳十一月二十八日　河州茨田郡十七ヵ所普賢寺古橋惣道場物也」とある[文29]。普賢寺は平安末から室町中期の七堂伽藍をもった寺院で，応仁の乱（石山戦争とも）時に焼失と伝える。『天文日記』『私心記』[文30][注3]に門真は散見し有力門徒の存在や一家衆との交流などがうかがえる。元亀元年（1570）８月17日古橋に畠山・三好軍勢が城を築いて立籠り大規模な戦闘が行われたことが各史料[文31]に見える。城の場所や願得寺と関連の有無は不明である。ルイス・フロイス『日本史』には二つの階段で上っていく「やや高いところ」と述べられている。

天正10年（1582）10月の羽柴秀吉禁制[文31]（寺蔵）には「河州十七ヵ所門真庄内古橋町」と見え，禁制を与えられる規模の町が形成されていた。天正４年（1576）院家の勅許を得て中本山となり文禄３年（1594）検地では寺地免除された。

集落形態

門真は古川右岸の平坦地に位置し，東西に清滝街道が通る。集落は街道沿いに西部の福所と東部の古橋からなる。願得寺のある御堂町は古橋にあり，願得寺を中心と

して古川沿いに集落が形成されている。現在辿れる小字名[文32]は願得寺を中心とする「古の浦」，西側に「石原」，さらに西側が「西垣外」，東側が「大倉」，さらに東側の古川に沿った「古川筋」，北側は「山の外」となる。現在集落南端は京阪電車の線路で分断されており，周辺の大規模開発で集落の範囲は特定できないが，小字名などを参照すると，願得寺を中心とした約300m四方ほどの方形の集落であったと思われる。願得寺周辺は道が雁行している（**図2—7**）。

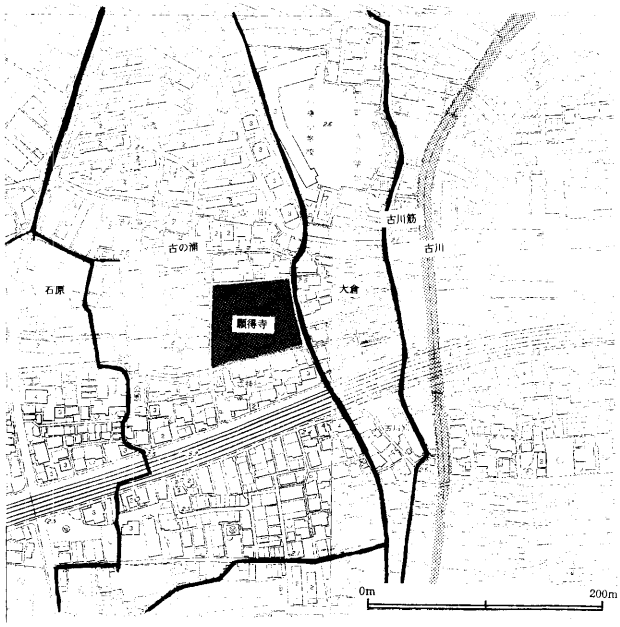

図2—7　門真地籍図小字名

2.10　溝杭　仏照寺　茨木市目垣

安威川流域の中世溝杭庄。在地武士溝杭氏の本拠となっていた。蓮如布教以前は仏光寺派の門徒集団であったが，文明15年（1483）教光により仏照寺が再建された。教光は蓮如の門弟として名高く文明９年（1477）の蓮如御文が残されている。仏照寺は茨木地方においても由緒が古く，拠点として中心的寺院であった。「政所賦銘引付」に文明14年（1482）「摂津国溝杭村仏照寺教光」が銭を貸している記載があり，すでに寺は経済的に確立していた[文33]。『天文日記』にも頻出し当番衆として金品を納志し，本願寺の斎に相伴するなど有力寺院のひとつであった。

集落形態

溝杭は安威川東岸に位置し，仏照寺を中心とした南北約350m東西約130mの集落である。目垣１丁目辺りは古代から中世に安威川下流域を支配していた在地領主土豪溝咋氏の城館[文34]とされ，「摂津志」にも山田城十三の支城のひとつにあげられている。仏照寺を中心として，北は崇徳寺にかけての一帯に砦を巡らせ，古代溝咋神社の参道先に当たる重要な地域であった。中世末には安威川沿いに目垣城を先行形態として，仏照寺を中心に集落発展がなされたと思われる。現在辿れる小字名[文35]は仏照寺を中心とする「中村ノ内」，北側が崇徳寺を含む「上ノ内」，南側が「下村ノ内」となる。集落内は整形の街区となるが道路は食い違いの防御的形態をとる（**図2—8**）。

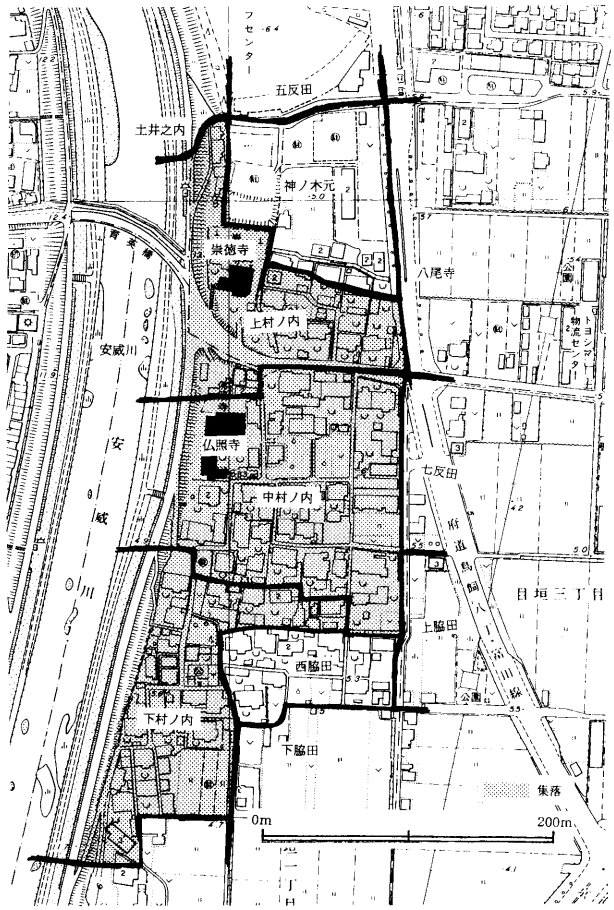

図2—8　溝杭地籍図小字名

2.11　野田　圓満寺・極楽寺　大阪市福島区玉川

天文２年（1533）証如が野田・福島を訪れた際，細川晴元一味に襲撃され，野田門徒が身命をなげうって戦い21人が討死，墓所に道場が建立されたのが始まりとされる。そのことに対する野田惣中宛の証如御書が残されている。翌年門徒久左衛門が法名教圓を授けられ，証如より「摂津国西成郡中嶋野田惣道場」宛に天文３年裏書の阿弥陀仏画像を下付された。『天文日記』にも野田は登場し，ほぼ毎年７月に頭料を納め28日の斎を務めている。野田門徒は「御頭講」で毎年７月28日に上山して御斎の筆頭席に座し，現在も続いている。天文５年７月21日条では，本願寺を訪れた中嶋衆８人のうちのひとりの「野田之者」に「座敷をたて候」てもてなしており，野田門徒が格別の位置にあったことがうかがえ，中嶋衆の中でも代表的な存在であった。ただし，野田門徒は頭料に加わらないこともあり，自立的性格が読み取れる。享禄４

年から天文元年（1531～1532）にかけて堺・天王寺・木津・今宮などで細川晴元と三好元長が対立した際，野田に城の原形が築かれたと思われる[文36]。享禄４年には三好軍が野田・福島を陣地としている。『摂津名所図会』には「野田城跡　野田村にあり字を城ノ内といふ。はじめ細川氏綱在城す。云々」とある。氏綱は天文年間晴元と抗争した武将で永禄３年（1560）死去している。元亀元年（1570）「野田・福島に猶以て堀をほり，壁を付け，櫓を上げさせ，河浅き所に乱株・逆茂木引き，当所へ楯籠らるるなり」と三好軍による砦の補強工事が行われ[文37]，立て籠もった軍勢は８千人ばかりと伝える[文38]。石山本願寺は元亀元年諸国門徒に対信長の武装蜂起を呼びかけ決起，重要な軍事拠点であった野田・福島を巡り抗争を繰り返した。最終的に天正４年（1576）信長の手に落ち同６年の木津海戦では信長方の重要陣地になったと思われる。

集落形態

野田の地は淀川河口の中洲が発達したもので，海老洲と福島に挟まれた小島が次第に地続きになったと考えられている。元禄９年（1696）「大坂大絵図」では，天満から野田に至る南中島は完全に地続きで，淀川・中津川が大阪湾に注ぐ河口の中間に位置する高台が野田である。石山合戦頃の野田と福島は区別は明瞭ではないが，両地にまたがる形で堀や城壁を巡らし塀や櫓を建て連ねた８千人の将兵が籠城しうる城構えをもったものと思われる。今日野田城の明確な遺構は残存しないが，圓満寺・極楽寺を中心とする玉川の一体は，周囲より一段地盤が高く水路がまわりを取り巻いている。「明治19年大阪実測図」[文39]によると，小字名には「字北ノ口」「字城之内」「字奥」「字堤」「字大北」「字大南」「字草場」「字村東」「字弓場」が残る。また，現在道になっているが明治の段階では水路であった部分が多く，集落の周辺から内部へ水路が幾筋も巡らされた複雑な構成がうかがえる。現在は集落南端を地方道大阪臨海線が横切り，一部分断されているが，主な町割は「実測図」とほぼ一致する。集落内の道路は食い違いになっているところが多く，防御的形態を残す。圓満寺・極楽寺とも「村東」「奥」に位置する。天文年間の野田門徒衆と野田城との関係はわからないが野田は中嶋衆の中でも独立した有力門徒であり，細川晴元と敵対する在地武士氏綱との共存も考えられる（**図2―9**），（**図2―10**）。

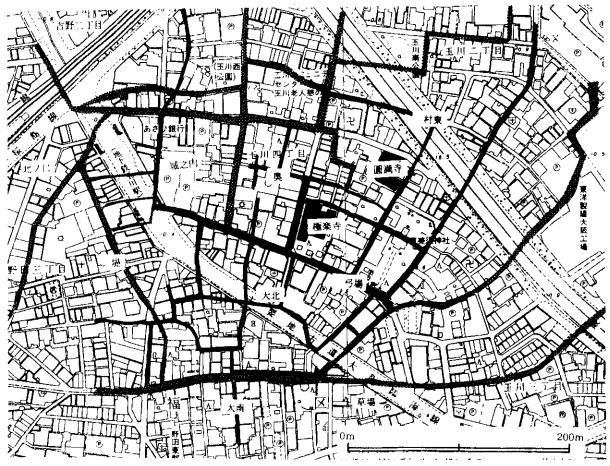

図2―9　野田復原図「明治19年大坂実測図」をもとに

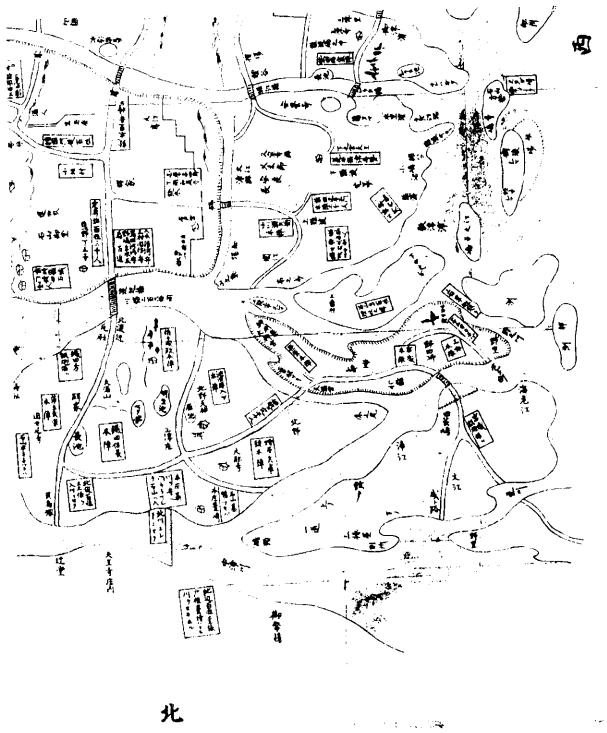

図2―10　「本願寺之絵図」（大谷大学所蔵）

2.12　若江（八尾）　光蓮寺　八尾市南木之本

光蓮寺は現在八尾市南木之本にあるが，中世には東大阪市稲葉にあった。永正10年（1513）実如裏書の親鸞御影が浄教に下されている[文40]。『天文日記』によると「若江光蓮寺」は頭料や当番による物品の志納，斎料の負担をし，斎に相伴するなど有力寺院としての位置にあった。光蓮寺が現在地に移転したのは慶長年間（1596～1615）と伝える[文41]。近世期には寛文11年（1671）「釣鐘免許御印書」をはじめとして本願寺からの下賜文書が多く残され[文42]，江戸中期から漸次地位を高めていったことがうかがえる。

集落形態

現在の集落は光蓮寺を中心として長方形の集住形態をとり，整形街区をもつ計画的な形態である。内部道路は食い違いとなる。光蓮寺は「字城の跡」に位置しているが古代「守屋ノ城郭跡」であると伝える。

3. 結語

以上『天文日記』に数多く登場する地域に関して考察した。いずれの地域も本願寺の「頭」役[文43]を務め経済的に本願寺を支え，経済基盤が確立しており中世末には近世的な町場に先行するなんらかの集落が形成されていたと見られる。しかし，それ以後の集落の形態は，代表的寺内町（**図3—1**）に見られるような整形の町割で背割りの街区を形成する計画性に結びつくとは限らない。

近年の寺内町研究では整形街区を形成する町形態は中世寺内町ではなく，むしろ近世に確立されたという見方が提唱されており，本稿においても同様に考えられる。計画性の差異が生じる理由のひとつとしては更地から開発された寺内町（富田林など）ではなく，先行する既存の集落・寺地が存在しているため新開発への制約があることが考えられる。また，天文期の有力門徒地域と近世的発展をした寺内町は必ずしも合致せず，中世末の段階から近世に確立された計画性のある都市へと移行する段階で，町形成に対しなんらかの都市化の意図が働くことが想定される。都市化の意図が働かなかった地域は，中世の基盤をもとに，近世においてそれぞれの地域の特質—地形・舟運・街道など—に影響されながら展開するといえよう。

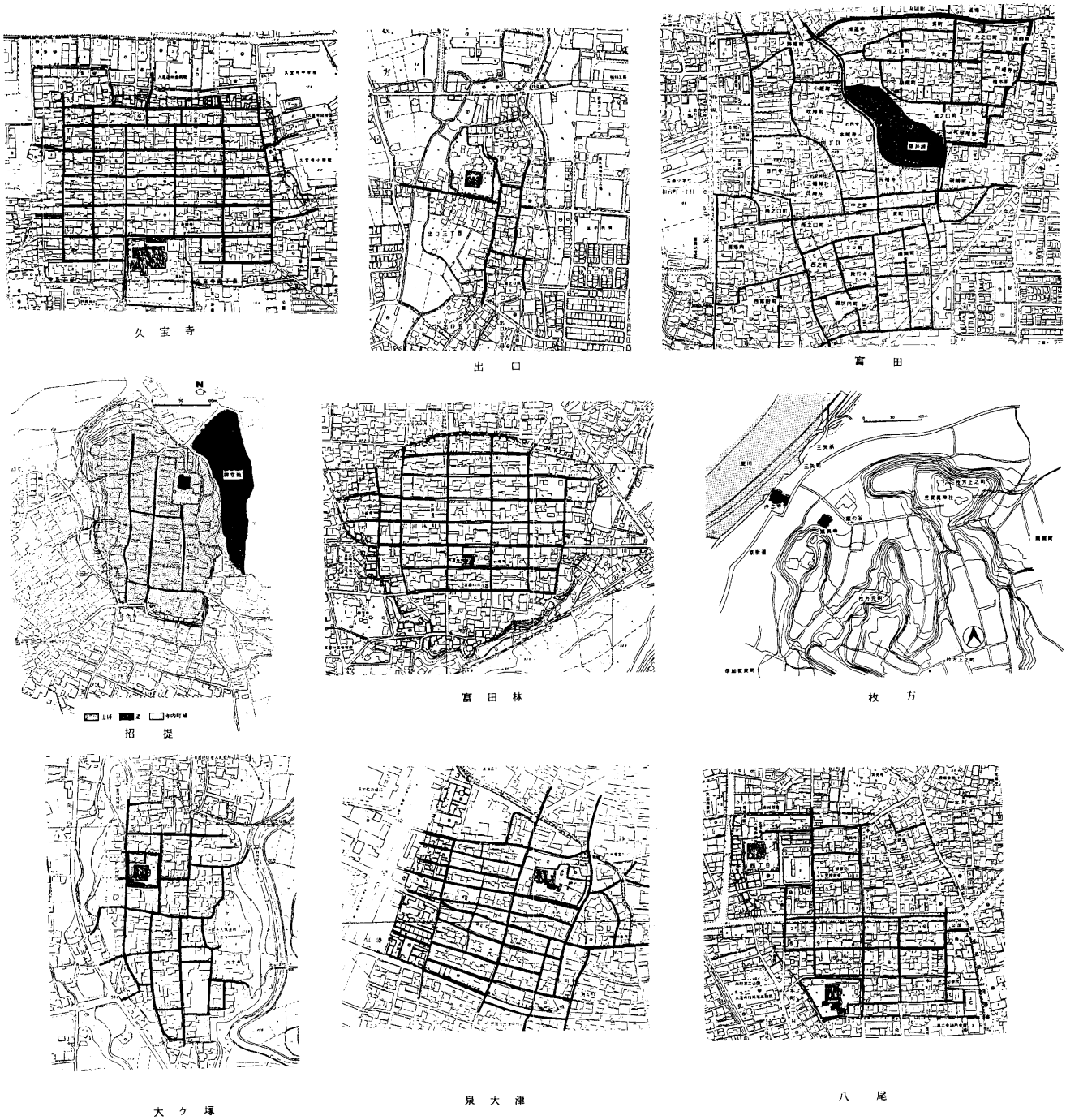

図3—1　寺内町推定復原図

＜注＞

1）中近世遺構の発掘成果により考古学の立場からは長方形街区と短冊形屋敷割は天正年間以前には存在せず，織豊系城下町系列中で独自に展開すると想定される。
2）河内国金田における「金田寺内中」の存在などがあげられる。
3）『私心記』天文２年８月４日条「門間へ行，為蓮見物也」，永禄３年４月22日条「清澤殿出口へ御入候（略）此方（順興寺）へ御出候へと（略）明日大（大坂）へ可御上候」などが見られる。

＜参考文献＞

1）藤木久志：統一政権の成立　岩波講座日本歴史９，岩波書店，1975
峰岸純夫：一向一揆　岩波講座日本歴史８，岩波書店，1976
2）仁木　宏：空間・公・共同体，青木書店，1997
摂河泉のなかの大坂・寺内町，歴史評論Vol.547，1995
脇田　修：日本近世都市の研究，東京大学出版会，1989
3）伊藤　毅：近世大坂成立史論，生活史研究所，1987
伊藤裕久：中世集落の空間構造，生活史研究所，1992
高橋康夫・吉田伸之編：日本都市史入門１，東京大学出版会，1989
4）渡辺定夫編著：今井の町並，同朋舎出版，1994
富田林寺内町，富田林市，1984
寺内町の基本計画に関する研究，八尾市教育委員会，1988
貝塚寺内町，貝塚市教育委員会，1987
5）前川　要：都市考古学の研究，柏書房，1991
6）鍛代敏雄：畿内寺内町と一向一揆，戦国織豊期の政治と文化，続群書類従完成会，1993
岩波由佳：「金田寺内」の成立と展開について，日本建築学会近畿支部研究報告集，1998
7）石山本願寺日記上，清文堂，1966（復刻）
8）真宗史料集成２，同朋舎，1977
9）真宗史料集成３，同朋舎，1979
10）大阪府教育委員会：紀州街道
11）岩波由佳・林野全孝：大阪府下における寺内町の成立と展開について，日本建築学会近畿支部研究報告集，1989
12）柏原市史４　史料編１，柏原市役所，1975
13）大阪府の地名２，平凡社，1986
14）柏原市史５　史料編２，柏原市役所，1971
15）河内の古道，藤井寺市教育委員会，1986
16）羽曳野市史　史料編別巻，羽曳野市，1985
17）大阪府の地名２，p.1072，平凡社，1986
18）岩波由佳・関智之・林野全孝：枚方市における旧寺内町に関する研究（その１），日本建築学会近畿支部研究報告集，1988
出口・招提の町並，枚方市教育委員会，1990
19）岩波由佳：摂津富田旧寺内町の成立と展開について，日本建築学会大会学術講演梗概集，1989
20）大阪府の地名２，p.1070，平凡社，1986
21）大阪府の地名２，p.1068，平凡社，1986
22）本願寺史料集成　木仏之留御影様之留，同朋舎，1980
23）本願寺史料集成　慶長日記，同朋舎，1980
24）藤井寺市史10　史料編８上，藤井寺市，1991
25）藤井寺市史６　史料編４上，藤井寺市，1983
26）滋賀県の地名，平凡社，1991
寺伝「誓願寺略縁起」（寺蔵）
27）藤井寺市史６　史料編４中，藤井寺市，1988
28）実悟記
29）門真市史３，門真市，1997
30）石山本願寺日記　下，清文堂，1966（復刻）
31）門真市史２　中世文献史料，門真市，1992
32）門真市役所蔵
33）大阪府の地名１，p.193，平凡社，1986
34）わがまち茨木　城郭編，茨木市，1987
35）茨木市役所蔵
36）日本城郭体系12，新人物往来社，1981
37）細川両家記
38）信長公記，角川書店，1969
39）日本文化研究所所蔵
40）「光蓮寺代々似影裏書写之」（寺蔵）
41）「光蓮寺略縁起宝物」（寺蔵）
42）八尾市内寺院古文書調査報告書，八尾市教育委員会，1991
43）早島有毅：戦国期本願寺における「頭」考　真宗研究Vol.26，1982